

ごみと現代人の戦いは続く

「ごみ」と「留萌びと」
その格闘の歴史



美サイクル館誕生秘話

1

浜中埋立場の限界
新しい処理場を探せ

時は昭和57年。皆さんは当時、どのようにごみを処理していたのか憶えているだろうか。

各家庭では適当な袋にごみを詰め込んでおもてに出すだけ。それを市の清掃車が収集してごみ埋立地へ運ぶ。あとはブルドーザーが土をかぶせるだけという、なんともお粗末としか言いようがないもの。

留萌市がその頃利用していたごみ埋立場は、その年に完成した浜中町の「留萌市ごみ処理場」。

この埋立場がごみで満杯になって使えなくなる平成4年を目の前にした平成3年、市は次の埋立地を探すべく作業を進めていた。



▲当時の浜中町のごみ処理場の作業風景。
最終的に平成9年まで使用期間を延長した。

ごみ処理場建設に
地元住民の反対運動

市は、平成元年にごみ処理施設基本構想をまとめ、翌年に基本計画を策定。そのなかで市内の2カ所が新ごみ埋立地の候補地となった。第一候補地は私有地であったため、土地の買収がうまくいかなかったことから断念。

これにより第二候補地である市街地から12km離れた藤山町に焦点が絞られた。

藤山町には市有地があり、市道も通っていた。また、これ以上市街地から離れると輸送時間がかかりすぎることを理由に、市は藤山町への建設を進めることを決めた。

しかし、そんな市の安易な考えに地元住民は猛反発。藤山町内の全83世帯はすぐに反対協議会を結成して建設反対運動を展開したのである。

4年間に及んだ住民との話し合い
そこから生まれた『美サイクル館』

市と反対協議会の話し合いは、平成3年12月に始まることとなる。

藤山町は市内でも有数の穀倉地帯であることから、反対協議会では土壌や水質汚染など、10項目をあげて建設反対の理由とした。

しかし、その話し合いの結果が『美サイクル館』を生むことになる。ではなぜ、ごみ埋立地建設の話し合いが『美サイクル館』を生むことになったのか。

それは「住民の反対理由を全て解

消するためには、どうしても現在の美サイクル館が持つ機能を備えた施設が必要」というものであった。

これにより、ごみ埋立地の建設をめぐる市と協議会の『対立の場』は、『リサイクル施設の建設へ向けた『協働の場』へと変わってゆくこととなる。

そして、平成5年4月に反対協議会は解散。翌年1月に対策協議会が結成され、リサイクル施設建設に向けた、市と協議会との具体的な話し合いが始まったのである。

市民、そして時代が望んだ施設
それが『美サイクル館』

当初の基本計画では、ごみを碎いて埋め立てようとしていた市は、反対協議会があげた10項目の反対理由を解消するため、資源化、堆肥化、固形燃料化したうえで、残ったごみを碎くなどして埋めることとした。

また、ごみ埋立場には全面にシートを敷き、水質汚染を防ぐための工夫と浸出高度処理（汚れた水をろ過して、取りきれないものを活性炭で吸着して取りのぞく）を施した。

そして平成7年3月、市と協議会の苦闘が報われる日がやってきた。廃棄物によって周辺環境に害を及ぼすことが無いよう万全の体制でごみ処理の運営を行うことを確認し合い、「廃棄物処理施設周辺の環境保全に関する協定書」を締結し、ごみ処理施設建設の合意に達したのである。協議開始からじつに4年、時間にして500時間を費やした、市と協



▲藤山町・留萌市美サイクル館の航空写真

議会の苦闘の日々は幕を閉じた。結果として、当初12億円を予定していた建設費は、リサイクル施設とごみ埋立地を合わせて約43億5千万円と大幅に予算をオーバーする結果となった。

しかし、その後、ダイオキシンの問題などから、世の中のごみに対する考え方が大きく変わったことにより、美サイクル館は全国的に脚光を浴びることとなった。大量生産・大量消費の社会からリサイクル社会へと変わってゆくなか、美サイクル館はまさに、時代が望んだ施設の完成となったのである。

ごみと現代人の戦いは続く

—ごみと留萌びと、その戦いの歴史—